

富永太郎と中原中也と

野坂 幸弘

I

まず題目の話です。この夏のことでしたが、小さな集まりで中原中也について話す機会がありました。その話題のひとつとして、中原中也と小林秀雄の〈愛人〉長谷川泰子の、例の〈グレタ・ガルボに似た女性〉コンテストへの応募写真を提示しようと思つて『新編中原中也全集』別巻の資料篇（角川書店・二〇〇四年）にこれが載つていたはずだとあちこちみていたところ、べつに富永太郎が宮澤賢治の「原体剣舞連」の一部をノートに筆写していたというその写真と、京都時代に中原中也との間で、この詩が「話題になった可能性は高いだろう」という解題を眼にして、心底、驚いてしまいました。そしてこの驚きを、私のなかに新しく生まれた興味として、もう少し考えてみたいと思いました。その時までの私の、富永太郎、中原中也、そして小林秀雄という組み合わせに関する伝記的あるいは詩史的なコンテクストは、おおよそつぎのようなものでした。

……旧制高校時代、人妻との恋愛がもとで、仙台を離れ、上海をさまよい、画業（絵画制作）に励みながら、象徴詩の翻訳と自らの詩作に勤しむ二三歳の富永太郎は、病を得て滞在中の京都で、ダダイストを自称し女優と同棲中の十七歳の中学生中原中也と遭遇する。その「嫌悪にみちた友情」の四十日ほどは、

他人の容喙を許さぬような真摯な対峙の時間であった。そして確執。一年後、太郎の病死。中也は初めて会った生身の詩人である太郎から、フランス象徴詩に眼を拓かれ、運命の罫すなわち小林秀雄との出逢いを用意されたのであった……

これが昭和三三年頃に、大岡昇平の中原中也の評伝『朝の歌』と「富永太郎の手紙」（雑誌『聲』連載）を読んで以来、ながく五〇年以上にわたつて、私のなかで固定されていた〈物語〉でした。しかしそこには意外なサイドストーリーが潜んでいたわけです。宮澤賢治の存在です。賢治を読む富永太郎の姿など、まったく思いもよりませんでした。ただ私がずうっと知らなかっただけということでもありませんが。

それでも中原中也が、『春と修羅』や『宮澤賢治全集』について書いているものは、なにかの折りに読んだことはありましたが、それについて考えてみようと思つたことはありませんでした。

ちょうどその頃、八月の上旬ですが、この講演の依頼を受けました。それにも驚いたのですが、渡りに船という感じで、ならばこの問題、いまはどうなっているのか勉強してみたいと引き受けたわけです。九月末までに題目をとということでしたので、その段階では（富永太郎と中原中也と）としておいて（と）の後は自由に考えてみよ

うと、こういう題目にさせてもらったわけです。

以来、三ヶ月あまり、暇にまかせて、薯づる式にどうか手当たり次第にいろいろと読んで考えてみました。

……今回の話題の年代については、西暦と元号の両方を混用することになりますので、話題の補足を兼ねて関連事項を年表風に作ってみました。文末に付してしますので参照して頂きたいと思えます。

ところで、富永太郎ですが、かつて私は大学入学の当座（昭和三一年です）、話を詩に限っても、全くのオクテでしたから、先輩や友人の話聞きながら、遅れを取り戻そうとこつそりと隠れるように、詩を読んだり、書きはじめたりしていました。

そういうなかで、富永太郎については、小林秀雄、中原中也と深い交流があつて、夭折したスゴイ詩人がいた、とボードレエルやランボオなどの名前と一緒に聞かされ続けておりました。しかし、肝心の作品を手にする事ができなくて、富永太郎は私にとつて名のみにとどまるとき存在だったわけではあります。

探していて、相当時間が経つて、創元文庫の『富永太郎詩集』（これは一九四九年・創元選書・大岡昇平編纂の文庫版です）を、小樽か札幌の古本屋で見つけてようやく手に入れることができて、これでは人並になれると喜んだものでした。へ一九五八・夏」とこの本の最終頁に私の書き入れがあります。昭和二六年発行で定価は五十円。いまも後生大事に持つてまして、今回はこれだけを持参しました。

中原中也のほうは、大学入学当初、小樽の古本屋で『現代日本名

詩選 山羊の歌・在りし日の歌』（筑摩書房・一九五三年）というテキストを買った覚えがあります。

今回、まずこの文庫本を取り出して見て、また驚きました。この創元文庫版に収録されている二八通ほどの書簡の一つ（正岡忠三郎宛・大正十四年一月十三日）に、

近頃発見した面白い詩をお目にかける。

これは宮澤賢治といふ人の『春と修羅』といふ詩集の中にある。この中のすべてがこれほどの傑作といふわけではないが、近頃大へん立派な詩集だと思つてゐる。手に入る折りもあつたら、一読してみるのもよからう。（略）

とあつて、そして

（え、水ゾルですよ

おほろな寒天アガアの液ですよ）

日は黄金きんの薔薇

紅い小さいな蠕虫ぜんちゅうが

水とひかりをからだにまとひ

ひとりでもどりをやつてゐる

（え、エイト 8 ガムマ y イー e スイツズ 6 アウア a

ことにもアラベスクの飾り文字）

と始まる「蠅虫舞手」の長い全文の写しが同封されていたと注記されています。この書簡のことは私の記憶には全くありませんでした。

それであらためて大岡昇平の『富永太郎―書簡を通して見た生涯と作品』（昭和四九年・中央公論社）をみると、ほかに宮澤賢治がらみでは、村井康夫宛書簡（大正十四年二月十九日付）のなかに「春と修羅」は要らないから上げよう」という一行がありました。この「要らない」は、時期的にみて、結核の病状が悪化していることを自覚していたからかと思われます。（ついでに言いますと「啄木遺稿を読んだ」という一節のある書簡もありました。これも正岡忠三郎宛、大正十二年一月九日付です）

また権田浩美の『空の歌 中原中也と富永太郎の現代性』^{モダニティ}（翰林書房・二〇一一年）によりますと、神奈川近代文学館所蔵の資料中の〈未刊行箇所〉に富永の遺した「フランス語ノート」があつて、その中に賢治の「青森挽歌」の一部分、十行ほどが筆写されているそうです。

最初に触れた富永の「原体剣舞連」の筆写は、辻潤「惰眠洞妄語」（読売新聞大正十三年七月二四日）の関連部分からです。

宮澤賢治という人はどこの人だか、年がいくつなのだか私はまるで知らない。しかし、私は偶然にも近頃、その人の『春と修羅』という詩集を手にした。近頃珍しい詩集だ。（略）

楯と樞とのうれいをあつめ

蛇紋山地に篝をかかけ

ひのきの髪をうちゆすり

まるめろの匂いのそらに

あたらしい星雲を燃やせ

dah-dah-sko-dah-dah (略)

原始林の香^{にお}いがブンブンする。真夜中の火山口から永遠の氷霧にまきこまれて、アビズマルな心象がしきりに諸々の星座を物色している。（略）もし私がこの夏アルプスへでも出かけるなら、私は『ツアラツストラ』を忘れても『春と修羅』を携えることを必ず忘れはしないだろう。（略）

当時、辻潤はダグイストを標榜しており、よく知られた存在ですから、〈ダグイスト中也〉との交流がなかったとしても、このように称揚された宮澤賢治という存在に、富永太郎は注目したといえるだろうと思います。ちなみに中也が『春と修羅』を入手したのは、大正十四年の暮れか翌年の初頭のこととされています。

これを「発見」された賢治の側から見るといふ視点は、ご承知のように、啄木・賢治には一切手を出さないことを建前にしている私は持ち合わせていないので、賢治研究の若い知人に聞いてみたところ、辻潤の評については、当然のように知っていました。そしてこれが宮澤賢治研究史の最初に位置づけられていることも確かめました（『宮澤賢治研究資料集成』第一巻・日本図書センター、一九九〇年六月）。またさきの正岡忠三郎宛の「発見」の書簡も『現

代詩読本 宮澤賢治』(思潮社・一九七九)に収録されていました。

II—1

たくさんある富永太郎・中原中也を論じた文章を、この二人の評伝上の新たな話題とここでの関心すなわち宮澤賢治に触れているかどうかを、目安にしながら読んでみました。この三ヶ月ほどに読み直したあるいは新たに読んだ範囲で、私の関心あるいは触手にかかってきたもののいくつかを取り上げてみたいと思います。

今日までの特に評伝的な研究のおおまかな流れは、大岡昇平が、さきに触れた『富永太郎―書簡を通して見た生涯と作品』と『中原中也』(講談社文芸文庫)などにみるかたちで、長年にわたって独占的に探索し定着したこの二人の像の部分的修正、加筆のようなものなどと言つてよいかと思えます。

ここでは、大岡自身による修正あるいは補完的な仕事として、小説「問わずがたり」(初出『新潮』一九七五・一・大岡昇平全集十三巻)と評論「問わずがたり」考―事実とフィクションの間に「『群像』一九七六・一、全集十七巻)。それと先に少し触れた、権田浩美の『空の歌 中原中也と富永太郎の現代性』^{モダニティ}。そして中村稔の『中原中也私論』(思潮社・二〇〇九年)を、おもに取り上げることにしたいとおもいます。

大岡昇平の小説「問わずがたり」は富永太郎の旧制二高時代の恋愛の相手(H・Sと呼ばれています)の所在を、伝記作家が訪ねあて

て、当時のことを聞き出そうと試みたことを題材とした作品です。

評伝の段階では、この二人の恋愛は、双方の関係者(太郎の側はおもに母親ですが)の話し合いによって、太郎が退学して仙台から退去させられるというかたちで、一応の決着をみたとされてきたわけです。

大岡はこの結末について(土壇場での裏切りは人妻の常、よくある話)的に片づけているわけですが、つぎのようにも書いてます。

大事なのは、事件が十九歳の学生である太郎の関しないところ、大人たちの間で解決されたことであろう。

太郎は巨女も自分と同様、大人の取り決めによって、疎外されたのではないかと考えた。そう考えるだけのものが、二人のあいだにはあった、ということだけは、われわれも信じたい(略)そして、以来その死までの四年の間、「立ち去ったマリア」が太郎のオブセッションになる。

この「立ち去ったマリア」は、マラルメの「秋の嘆き」の冒頭に由来するものですから、「オブセッション」は(妄念・執念)であるとともに(詩的創作の主題・モティフ)になったということです。その例の一つとして富永太郎の代表作である散文詩「秋の悲嘆」の一節を次に引用しておきます。

(略) 夕暮れ、私は立ち去ったかの女の残像と友である。天

の方に立ち騰るかの女の胸の鬘を、夢のように萎れたかの女の肩の鬘を、私は昔のやうにいとほしむ。だが、かの女の髪の中に挿し入った私の指は昔私の心の支へであつた、あの全能の暗黒の粘状体に触れることがない。私たちは煙になつてしまつたのだらうか？ 私はあまりに硬い、あまりに透明な秋の空気を憎まうか？（略）

「われわれ」は、太郎の「オブセツション」（無念）を晴らすべく、仙台を尋ねて、相手方の五十年以前の記憶を問うて（真実）を引き出そうとしたわけです。

私はこの作品を発表当時読んでますが、深く考えた記憶はありません。しかし奇妙な雰囲気の後感というか印象が残っていて、今回、あれがあつたはずだと探しましたがすぐには見つかりませんでした。記憶では「煙のゆくえ」という題名だと思つていたのですが、実際には「問わずがたり」という（拍子抜け）するような題名でした。私の記憶のなかの「煙のゆくえ」は、「私たちは煙になつてしまつたのであらうか？」これは先に引用した「秋の悲嘆」の一行ですが、これと作品の最後に、太郎の描いた火葬場の煙突と煙の絵の話題が、事実にあつた感を感じた挿話として、余韻を残すかたちで出てくるので、題名として記憶に残つていたのかもしれない。

これを承けるのが、評論「『問わずがたり』考」です。こちらは今回初めて読んだような気がしています。富永太郎の伝記作家が、

この恋愛に由来する太郎の「オブセツション」を、太郎にかわつて解明したかにみえる、この訪問を（小説）として発表したことへの様々な反響があつたようで、それに答えるかたちで、背景的な事情、事実の領域と仮構、推測の部分などをこと細かに明しています。この「問わずがたり」および「『問わずがたり』考」は、大岡昇平の富永太郎への傾斜の深さを語る作品だと思ひます。

さきの権田浩美は、この大岡の評伝「富永太郎」に異を唱えておられます。なかでも太郎の人妻との一件に関しては、『中原中也研究』（中原中也研究会発行・第十二号・2007）に掲載された池上聡（この人は神奈川近代文学館の学芸員と紹介されています）の一文をその論拠として取り上げています。

その池上聡の「富永太郎の年譜的事項について——富永謙治日記紹介」は、太郎の父親の日記（これは神奈川近代文学館所蔵の未公開資料のようで、この日記を大岡は見えていないと筆者によって推定されています）の、大正十年十二月十二・十三日、仙台での、双方の話し合いに係る部分を紹介して

この謙治日記の記述と大岡「富永太郎」の記述間の相違は非常に重要である。（略）S夫人は一二日に謙治と面会した際には「太郎ノ云フ所ト相違ノ点アリ」と、太郎との恋愛関係を否定したらしく思われるのだが、翌日の夕方、Y家で太郎と直接面会した席では、太郎の「所思」と「全く同一ナリ」と恋愛

関係を認めたらしく思われること、などである。特に、一三日の記述を事実と考えると、太郎が最後、夫人に「裏切られた」形で失恋した、というこれまでの伝記が覆ることになり、その後の太郎の生涯と作品の解釈にも影響を及ぼすこと必至といえよう。

と結論づけています。権田は、池上の紹介文にまるまる乗る形で、大岡昇平の評伝を繰り返し（一書のなかで三回ぐらい）批判しています。この池上・権田の糾弾ともいべき異論に関しては、検討の余地におおいにありますが、太郎の失恋は変わらないわけだし、まして大岡が二人の仲を裂いた訳でもない、とだけコメントしておきたいと思います。

II-2

さらに権田浩美は、伝記的な面に加えて、富永太郎・中原中也と宮澤賢治との関係を、今回読んだ範囲で量的には最大に論じています。権田は、大岡昇平によって独占的に評伝として定着された（『ポードレリアン』）としての富永太郎の「貌」を、一九一〇年代以降の世界同時的な芸術の新動向、前衛絵画・演劇、舞踏などの舞台芸術、映画などの新興芸術の、輸入的実験への、太郎の関心の深さの方向へ、さきにも触れた（『未公開資料』）を探索して、大岡の資料の選択から、落ちていた多数に、光を当てることによって、修正あるいは訂正の必要を強調しています。

そして権田は、富永太郎と中原中也が、共通に触れている宮澤賢治の二つの詩作品についても、〈プリミティブ〉をキーワードとして論じています。

権田のいう〈プリミティブ〉の概念は、

新興芸術の先駆的役割を果たしたゴーギャンの絵画史的位相については周知の通りである。文明に侵かされていない楽園を求めてブルターニュ、そしてタヒチへと彷徨し続けたゴーギャン（略）その作品に一貫する〈プリミティブ〉なものへの志向は、新たな創造の為の始原回帰の必要性からだろう

と説明されていて、そして「アンキリダクシエンツ蠕虫舞手」を「未分化なものの犇めきも（プリミティブ）な混沌につながっている（略）この詩を評価した富永は、宮澤の芸術的営為の核心に内在する〈プリミティブ〉なものを、直観していたのかもしれない」と推測して、「原体剣舞連」については、辻潤の評語の「原始林の香いがプンプンする」を引用しながら「生命力が漲り横溢する原始の闇夜、祝祭の異装を身に纏い剣を閃かせる群舞は、パリを魅了したバレエ・リュスの〈プリミティブ〉を顕現したポロヴェッツ人の踊りを彷彿とさせよう」と言っています。（この「バレエ・リュス」というのは、二〇世紀初頭の伝説のバレエ団だそうで、最近の日本公演に関する新聞の記事で知りました）

一九一〇年代以降の西欧の新芸術の動向を原始性・〈プリミティブ

ブ)の発見という美術史の「周知」の話題をふりかざして、(プリミティブ)を連呼するのは、良い度胸だと敬意を表したいとおもうのですが、(プリミティブ)はまだ続きます。

宮澤賢治の例の(メンタル・スケッチ・モデファイド)と中原中也の詩論の核心部分である(名辞以前の世界)を、シュルレアリスムと(プリミティブ)を媒介として、さらに太郎の作品である「原始林の縁辺に於ける散歩者」にも(プリミティブ)を見出すという、(プリミティブ)一本槍で、賢治・太郎・中也をつらぬく、権田浩美の試みは、このテーマに関して、従来のには、特に中也に関する場合、例えば比較的に新しいものでは、青木健の『中原中也再見』(角川書店・二〇〇七)などがそうですが、用語・フレーズ・発想の面での、賢治作品からの受容あるいは共通性の指摘に止まっているレベルを越えたものとして、教わることもあった大著です。

ただ、かつて北川冬彦がどこかの国の「記録映画で、ボルネオあたりの土人の剣舞を見たが、あれに似ている愉快な詩だ(略)面白い」(『現代詩Ⅱ』角川新書・昭和三二)と「原体剣舞連」を評したように、権田の論法は、賢治の場合によっては未開人・タヒチの側面に押し込まなければならなくなるのではないかと、すこし心配です。そして宮澤賢治研究者の境忠一の「中原中也と宮澤賢治」(『中原中也の世界』所収・冬樹社・一九七八)が、中野の宮澤賢治論を丁寧に分析していることに注目しましたが、そのなかで境は「昭和十年代の『春と修羅』の評価は一般にモラリツシユであるか、原始感覚というような方向に分けられる」としていることも、これにつけ

加えておきます。

II-3

つぎは中村稔の『中原中也私論』(思潮社二〇〇九)です。一九二七年生まれの中村稔のこの本には刮目させられました。一九五六年の第一次『中原中也全集』以来、新編全集まで、四次にわたる全集の編集委員を大岡昇平等とともにつとめてきた中村稔は、自らの中原中也論の集大成ともいえるべきこの本の「後記」に「私は私のこれまでの中原に対する見方は決定的に間違っていたことに気づき、少なくとも私の見方には重大な欠落があると考えるようになっていた」と看過しがたいようなことを書いています。

じつは私と同年代で、中村稔という同姓同名のピッチャーが、以前に読売巨人軍で活躍していたせいで、なんとなく詩人のほうの存在を疎んじていたのですが、今回、反省して中村稔の詩集と他の著書にも注目しました。

中村の云う「決定的な間違い」は、残念ながら、具体的な事例・箇所としては特定できませんでした。しかし、眼をみはるような思いで読んだところは沢山あります。その例として、ここでは「中原中也と大岡昇平」の章で示されている、徹底した大岡昇平批判に触れてみます。この章は「後記」によりますと、二〇〇七年前後に「書いたが」、「発表したいとは思わなかったので『筐底』にしまいこんでいた」しかし自分に「残された時間を考えると、いささか心残りのように感じるようになった」というのが公表した理由だとされて

います。

中村稔の大岡昇平批判は、権田浩美の場合のような資料レベルのものではなくて、論点は詩作品の理解、「友情」、そして芸術との関係においての「生活」です。たとえば

大岡が中原の詩作品を解説したり鑑賞したりしている文章に接して、私には同意できないことが多い（略）

大岡が富永の詩についても誤解しているのではないかという感がふかい（略）

大岡は詩を詩そのものとして鑑賞するよりも、その詩が中原の生涯にどういう位置を占めるか、あるいはどういう生活態度と関連するか、に関心があつたようにみえる。しかも、その位置づけ、関連づけにも大岡の誤解があり、そのために大岡は中原の詩をかなり誤解していたのではないかと私は疑っている。

というような文章が随所にあつて、中村は個別の作品の具体的な検討を踏まえながら批判を加えています。そういう批判の白眉とも言うべき例が、中也の作品「玩具の賦——昇平に」（昭和十一年七月・未発表詩篇）の読み方に関わつてあります。中村稔は「大岡はこの作品の痛切さを理解していたとは思われない」と断言しているわけですが、もう少し詳しくみると、この「玩具の賦」の

どうともなれだ

俺にはなにがどうでも構はない（略）

おれにはおもちやが要るんだ

おもちやであそばなくちゃならないんだ（略）

おれはおもちやであそぶぞ

おまへは月給で遊び給へだ

おもちやで俺が遊んでるとき

あのおもちやは俺の月給の何分の一の値段だなどと云ふはよいがそれでおれがおもちやで遊ぶことの値段まで決まつたつもりであるのは

滑稽だぞ（略）

という冒頭部から文庫版で五頁におよぶ、月給取りになつた大岡昇平に対する、罵詈謗的な表現から、中村は、中也の人生原理・根元的思想である「芸術対生活ないし芸術家の属する領域と対立する対人圏あるいは生活圏との二元論」をこそ、読みとらなければならぬのに、「大岡は『玩具の賦』を中原のこうした思想との関連において読んでいなかったことは間違いない」と言い、また大岡が中原に対して人前で「生活の知恵を誇示」したということなどからも、「大岡の姿勢は友人として中原に対して、あまりに無理解で、むごいものだったのではないか、という疑問をいつそうふかくするのである」さらに「互いに不快な関係はあつても、いかに生きるか、いかに書くか、をめぐる中原と大岡は喧嘩をしたという記述はない。大岡は言い負かされるのを避けて、つねに論争には背を向けて

いたのである。だから、大岡と中原の間に真の友情が成り立つはずもなかった、とおもわれる」そして「大岡と中原の友情は、たぶん大岡の側の誤解のために、中原の生前、破綻していたのである」と結んでいます。これはこの章の最後のことばです。

こういう激しい文章を読むと、背景的なことをいろいろと憶測しなくなりませんが、ありました。大岡の『「恥の歌」その他』という文章です（全集十七巻・初出『海』昭四八年一月）。こちらのほうをあとで読んだのですが、なにかの座談会で富永太郎の「恥の歌」の評価をめぐって、大岡は中村と意見が合わなくて、同類としていっしょに『中原中也全集』の編集をしていたのに、ショックだったとあまり長くはなく書いてます。おそらく、いろいろな場面で、中村と大岡は、見解の齟齬を積み重ねていたのだと思います。

しかし、ここでは、「友情」に注目したいと思います。われわれのボキヤブラリーからは消えているような感じがする「友情」は、中村稔ならずとも重くて大切なものです。私などはこれについて意見を述べがたいので、この本の他のコンテキストから探してみると、いうところの「友情」のすがたは「中原中也と小林秀雄」の章の

泰子を奪われた恨み、つらみは別として、小林は中原にとつてどうしても必要な、心を開いてかたることのできる、かけがいのない語り相手であった。

こうして中原と小林は鎌倉で再会した。中原の遺著『在りし日の歌』の詩稿は仮面のような顔をした中原から小林に託され、

小林によって出版された。それが小林の中原に対する最後の友情の証しであった。

というところに窺うことができると思います。

権田浩美、中村稔、と部分的にその論をみてきたわけですが、名だたる論争家であった大岡昇平が存命なら、このような批判に如何なる反応を示すか、興味深いところです。

III-1

分銅惇作の『中原中也』（昭和四九年・講談社現代新書）に興味深い一節がありました。中原中也の宮澤賢治からの影響に触れたところで、

だが生前の二人の詩人は親しくあいさつを交わす機会がなかったのである。もし二人が出会っていたと仮定したら、共通性よりは異質性のほうが際だって、中也の交際術は例によって穏和な賢治を悩ますことになったのではないかとおもわれるが。

という文章です。また佐々木幹郎が『春と修羅』と中原中也』（『新校本宮澤賢治全集月報十七』筑摩書房・一九九九年四月）で「中原にとつて賢治の詩との出会いは、（略）まったく異種の文化との遭遇と言っても良かったと思う」というような、中也と賢治の出会いを想像するのは、たしかに興味津々だと思います。

そして、宮澤賢治がだめなら、太宰治がいる、というような話になります。新編全集別巻の詳細な年譜の昭和九年十一月十五日の項に「このころ、草野の紹介で檀一雄を知る。檀の家で太宰治を知る。好きな花の話題が中也・草野と檀・太宰の乱闘騒ぎへと発展」とあります。この記述は檀一雄の『小説太宰治』に基づいているので、その場面を読んいただきます。

「何だ、おめえは青鯖が空に浮かんだような顔をしゃがって。全体、おめえは何の花が好きだい？」

太宰は閉口して、泣き出しそうな顔だった。

「ええ？何だいおめえの好きな花は」

まるで断崖から飛び降りるような思いつめた表情で、しかし甘ったるい、今にも泣きだしそうな声で、とぎれとぎれに太宰は云った。

「モ、モ、ノ、ハ、ナ」云い終って、例の愛情、不信、含羞、拒絶何とも云えないような、くしゃくしゃな悲しいす笑いを泛べながら、しばらくじっと、中原の顔を見つめていた。

「チェッ、だからおめえは」と中原の声が、肝に顫うようだった。

(略)

第二回目に、中原と太宰と私で飲んだ時には、心平氏はいなかった。太宰は中原から、同じように搦まれ、同じように閉口して、中途から逃げて帰った。この時は、心平氏がいなかった

せいか、中原はひどく激昂した。

「よせ、よせ」と、云うのに、どうしても太宰のところまで行く、と云ってきかなかった。

雪のよるだった。その雪の上を、中原は嘯くように、

夜の湿気と風がさびしくいりまじり

松や柳の林はくらく

そらには暗い業の花びらがいっぱい

と、宮澤賢治の詩を口遊んで歩いていった。

この「モ、モ、ノ、ハ、ナ」の挿話、私も大好きで、時々思い出しているのですが、「好きな花」が、酒を飲みながらの話題となっただきつかけは、中也も加わって、一号だけで終わった同人雑誌『青い花』の誌名の「青い花」に、太宰がこだわっていたことは知られていることです。その関係からかなと思ってきました。そして太宰はけっこう花が好きだったようですから、この場面でなんと答えるべきだったのか、などと考えてもいました。

ところで引用の後半(略)以下は、別の日の話ですが、中也が「夜の湿気と風が」の詩を「嘯くように」とあります。これは『春と修羅』第二集の作品ですから、中也は、当時、出たばかりの文圃堂版の賢治全集で読んで、すぐに覚えたのかとおもいますが、確認はしてません(引用の一字が違っています(「林はくらく」はくろくです)。このくんだり全体が檀一雄のフィクションという可能性も考えられますが、いまは措くことにします。

そして「何だいおめえの好きな花は」と中也に迫られた太宰は「ゴ、ウ、ノ、ハ、ナ」と答えれば良かったのだと、今回、思いつきました。如何でしょうか。

Ⅲ—2

ここでどうしても触れておきたいのは、長谷川泰子についてです。この存在に私はずうっと興味をもっていました。

村上護による聞き書きの自伝『中原中也との愛 ゆきてかへらぬ』（昭和四九年・講談社、角川文庫版・平成十八年）とか、彼女の数編の詩作品を、新編全集の資料篇などで読んで、そして晩年になっても「中原みたいな純粋な人を捨てた女が憎い」という青年に、スカーターのつきまとわれることもあったらしい、この泰子という女性にすこぶるつきで好感をもちました。

ここでの話題に絡めて言いますと、富永太郎と中原中也の京都での出会いの時期、熱烈な訪問癖で有名な中也ではなくて、太郎のほうが大岡昇平は「女手があったから」のひとことで済ませています。女性にすぐに惹かれる傾向があったといわれる、演劇や映画も好きだった富永太郎ですから、当時二十歳前後の女優・長谷川泰子に逢いたくて、顔を見たくてだったでしょうが、と思います。

また大岡は、泰子について「随分長い交際だが、正直のところ私には何の感想もないのである。（略）私は彼女に魅力を感じないた

ちに生まれていたので、この点について何もいうことはない。（略）中原が死んだ時、横光利一は焼香する彼女の顔を美しいといったとか書いていますが、ここでは、長谷川泰子の実体的な人間像に触れた数少ない例として、三度会ったことがあるという秋山駿の「長谷川泰子——愛人の役を完うした、いい女」（『ユリイカ』昭和六〇年十月）を挙げておきたいと思えます。

私は長谷川さんを見て、よかったと思った。或る無邪気さを深く持っている人で、それは、彼女の生きる上での一種の勇氣に支えられている。その勇氣を、可愛らしさとして表現しているのが、この人の女としての才能であろう。なるほど、中原や小林の「愛人」としてふさわしい人だ、と見えた。（略）

結局、泰子は、それぞれの男にそれぞれの望む夢を見させてやった、いい女なのではないか、と思う。

そして、愛人関係のもっともいいところは、小林が去った後の泰子と、中原との間に、流れていたような気がする。それは、それから作った中原の詩の質が証明していると思う。（略）

これを読むと、中也も泰子も良かったな、という感じがします。秋山駿の「いい女」に対して、川上弘美が、日記や手紙を通して得た、中也の印象を「いい男」「『いい感じの』男」だと評している（前出角川文庫所収のエッセイ）ことをつけ加えておきましょう。

さきほど「友情」という話題にふれましたが、富永太郎の生涯の友で、今回も冒頭からその名前が出てきている正岡忠三郎の存在にも注目しなければなりません。正岡子規のいところで、正岡家を嗣いだ人です。富永太郎の遺髪を、長年、隠しもち、百五十通あまりの書簡を大切に保存していたと言われています（大岡昇平の紹介した富永太郎の書簡百十二通のうちの九十通ほどが正岡宛です）。

正岡忠三郎に注目とは言っても、時間的な余裕も無さそうですし、私が知り得たのは、多くの人がこの関係で触れている、司馬遼太郎の『ひとびとの発音』上・下（中公文庫・昭和五八年）を読んできただけの範囲です。これまで、ほとんど読んだことのなかった司馬遼太郎の、富永太郎没後の正岡忠三郎の人生を、もう一人の友人で『驢馬』の同人・日本共産党の幹部だった、西沢隆二（ぬやまひろし）（タカジ）のユニークな足跡とともに辿る、著者自身の体験を交えた評伝・友情の物語に、いたく感動しました。ただ書名をあげただけで終わってしまうのが残念ですが。

IV

富永太郎と中原中也と、（と）のあとを承ける存在として、宮澤賢治、太宰治、長谷川泰子、正岡忠三郎の場合を少しだけ挙げてみました。触れ残した多くの文献もあります。これを考えている途中では、宮澤賢治それも「原体剣舞連」の評価の問題を焦点として詳しく考えてみたいと思いましたが、それは私の任たりえないところ

でありますので、最後に、二十歳の私の関心の一方を占めていた伊藤整の存在を（と）のあとに敢えてもちだしてみたいと思います。

中村稔は樋口覚との対談「詩史としての中原中也」（『中原中也天体の音楽』青土社・二〇〇七年所収）で、昭和詩史上の「アンチ中原」の代表的存在として伊藤整に言及しています（大岡昇平も、さきの『『恥の歌』その他』で、伊藤整が中原・富永の二人を全く認めていなかったと嫌味まじりに触れていました）。

中村はさきの『中原中也私論』で「中原は、その生涯をつうじて、両親に、父親の死後は母親に、寄食した」と、その「生活」能力の根本的な欠落を指摘して、それが中原の生の一面、と特徴づけています。どうじに「中原中也の世界ははるかに多様であり、その魅力の説かなければ、中原中也像は描けないと、いまの私は考えている」とも強調しています（さきの大岡昇平批判にあつては「生活」対「芸術」における中原の根本思想を重視していたわけでした）。これには中村稔自身、有能な弁護士生活を長く続けていることも思い合わせてみる必要があるとおもいます。

そして伊藤整ですが、自伝的作品の『若い詩人の肖像』に、「三年間働いて、金をためて商業学の大学に入る、という人間が、本質的な抒情詩人である筈がなかった」と露悪的・偽悪的に自己の青春期を顧みるところがあります。このような伊藤整が中原中也とは対照的な存在だったことは確かです。

その上で、「中也は北海道へもいきたかったんですが、あのときは、私がお金をだしませんでした。北海道へやっておいたら、そこでえ

え詩ができたかもしれませんのに」(中原フク述・村上護編『私の上
に降る雪は』講談社文芸文庫・一九九八)ということばを思いだ
しながら、中也の固有の風景を詠んだ詩篇と、伊藤整のたとえば「林
檜園の月」(『雪明りの路』一九二六)のような詩を対置してみるの
もおもしろいかとおもいます。しかし、それはまた別に機会を得て、
ということでお終いにさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

(二〇二三年二月七日 岩手大学語文学会 講演)

【関連年表】

- | | | | |
|-------------|--|-------------|---|
| 一九一四 (大正三) | 富永太郎、東京府立第一中学校入学、小林秀雄は一学年下。 | 一九二六 (大正十五) | 中也「夭折した富永」(『山繭』) |
| 一九一九 (大正八) | 太郎・正岡忠三郎、第二高等学校(仙台)入学。 | 一九二七 (昭和二) | 『富永太郎詩集』(家蔵版 村井康雄編・二百部) |
| 一九二二 (大正十) | 太郎(二十歳)、医師の妻H・Sと恋愛事件、二高退学、帰京。 | 一九二八 (昭和三) | 中也、大岡昇平を小林秀雄宅で知る(三月)。 |
| 一九二二 (大正十) | 二高退学、帰京。 | 一九二八 (昭和三) | 小林、泰子との同棲の家から出奔。 |
| 一九二二 (大正十) | 太郎、上海行(三ヶ月)。中原中也、立命館中学に転入学、ダダ風の詩の習作、長谷川泰子に会う。 | 一九二九 (昭和四) | 『草野心平』『第百階級』 |
| | | 一九二九 (昭和四) | 同人雑誌『白痴群』創刊(河上徹太郎・大岡昇平他)、中也「寒い夜の自画像」他を発表。 |
| | | 一九三〇 (昭和五) | 小林秀雄「様々な意匠」(『改造』) |
| | | 一九三〇 (昭和五) | 中也、「盲目の秋」「汚れつちまつた悲しみに……」(『白痴群』) |
| 一九二四 (大正十三) | 太郎、京都滞在。中也(十七歳)、泰子(二十歳)と同棲。太郎・中也、交友。太郎、「秋の悲嘆」他一篇(『山繭』一号)、帰京。 | 一九三一 (昭和六) | 泰子、(グレタ・ガルボに似た女性)に応募、一等に当選。 |

*宮澤賢治『春と修羅』、辻潤「惰眠洞妄語」で「原体剣舞連」を賞賛。

一九二五 (大正十四) 中也・泰子と上京(三月)、太郎の紹介で小林秀雄を知る(四月)。

富永太郎、死去(十一月十二日)。泰子、小林秀雄のもとへ去る。

中也『春と修羅』購入(暮れから翌年初頭の間)。

大岡昇平(十六歳)、富永次郎を通して太郎の詩を知る(十二月)。

*伊藤整『雪明りの路』

『富永太郎詩集』(家蔵版 村井康雄編・二百部) 中也、大岡昇平を小林秀雄宅で知る(三月)。

小林、泰子との同棲の家から出奔。

*草野心平『第百階級』

同人雑誌『白痴群』創刊(河上徹太郎・大岡昇平他)、中也「寒い夜の自画像」他を発表。

小林秀雄「様々な意匠」(『改造』) 中也、「盲目の秋」「汚れつちまつた悲しみに……」(『白痴群』)

泰子、(グレタ・ガルボに似た女性)に応募、一等に当選。

一九三三(昭和八) 中也、上野孝子と結婚。『四季』二号に「帰郷」
他。

一九三四(昭和九) 文也(長男)誕生。『山羊の歌』刊行。太
宰治との〈花の名前事件〉

*『宮沢賢治全集』(全三巻・文圃堂)

一九三六(昭和十二)「一つのメルヘン」(『文芸汎論』)、文也病没。

一九三七(昭和十二) 中也、中村古峽療養所に入退院。鎌倉で永眠
(十月二二日)。

一九三八(昭和十三)『在りし日の歌』刊行(創元社)

【関連人物の生没年】 生年順

・富永太郎一九〇一(明治三四) ー 一九二五(大正十四)・正岡
忠三郎一九〇二(明治三五) ー 一九七六(昭和五一)・小林秀
雄一九〇二(明治三四) ー 一九八三(昭和五八)・長谷川泰子
一九〇四(明治三七) ー 一九九三(平成五)・中原中也一九〇七(明
治四〇) ー 一九三七(昭和十二)・大岡昇平一九〇九(明治四二)
ー 一九八八(昭和六三)・太宰治一九〇九(明治四二) ー 一九四八
(昭和二三)・檀一雄一九二二(明治四五) ー 一九七六(昭和五一)
*宮澤賢治一八九六(明治二九) ー 一九三三(昭和八) *高橋新吉
一九〇一(明治三四) ー 一九八七(昭和六二) *草野心平一九〇三
(明四〇) ー 一九八八(昭六三) *伊藤整一九〇五(明三八) ー
一九六九(昭和四四)